沖縄県におけるインフルエンザ発生動向について

古謝由紀子，下地實夫，平良勝也

Surveillance of the Influenza Occurrence Trend in Okinawa Prefecture

Yukiko KOJA,　Saneo SHIMOJI and Katuya TAIRA

要旨：沖縄県では，感染症の発生や流行情報を正確に把握し分析して，その結果を県民や医療関係者に迅速に提供，公開するため，「感染症の予防および感染症の患者に対する医療に関する法律」に基づき感染症発生動向調査事業を行っている．2007 年のインフルエンザの発生動向については，年間 32,412 人の報告があり，前年比約 2 倍に増加した．また，3 年連続(2005～2007 年)冬季と夏季の流行期がそれぞれあったこと，流行開始の時期等で差異が見られたことが特徴として挙げられる．

Key words：一定点当たり，年間報告数，警報，注意報，ピーク，インフルエンザ，感染症発生動向調査

Ⅰ　はじめに

沖縄県では，感染症の流行状況を把握し，感染症の発生予防及びまん延防止等に寄与するため，1980 年 7 月から県医師会および定点医療機関の協力のもとに感染症発生動向調査事業を開始した．また，1999 年 4 月に感染症新法が施行されたことに伴い，感染症情報のより迅速な提供を行うため，このオンラインシステムを拡充し，2000 年 7 月 12 日に「沖縄県感染症情報センター」を沖縄県衛生環境研究所企画情報室に設置した．

感染症発生動向調査事業は，「感染症の予防および感染症の患者に対する医療に関する法律」及び「感染症発生動向調査事業実施要綱」等に基づき，対象となる 99 の感染症について，患者発生状況を医療機関から所轄保健所に報告，県健康増進課で集約したデータを感染症情報センターで分析，加工を行ない，保健所及び関係医療機関等に還元してきた．

今回，感染症発生動向調査事業に係る 2007 年におけるインフルエンザの発生動向について報告する．

Ⅱ　方法

1. 感染症発生動向調査事業

医療機関から各保健所に報告されたデータは感染症情報センターに電子データとして集約され，当センターにおいて加工，分析を行っている．今回の報告は 2007 年インフルエンザの患者発生状況のデータを使用した．

Ⅲ　結果および考察

年次別患者報告状況の推移では，2006 年は中程度規模の報告数(16,975 人)があったが，2007 年には，一定点医療機関当たり(以下定点当たり)1.0 人を上回る週が 50 週続き，年間報告数(32,412 人)は過去 10 年間で最高となった(図 1).

週別の推移でも，2007 年の年間報告数は 32,412 人で前年の 16,975 人と比べ，1.91 と約 2 倍に増加した．

また本県では，冬季(以下，第一流行期とする．)の流行期の他に夏季(以下，第二流行期とする．)に流行するという，全国的にも珍しい傾向が，3 年連続(2005～2007 年)みられた． 第一流行期は，第 7 週(10.52 人/定点)に昨年より遅れて入り，ピーク第 11 週(53.17 人/定点)以降は減少，第 18 週に終息し，冬季では過去 10 年間で 3 番目に大きな流行となった．第二流行期は，第 25～30 週(6～7 月)，ピーク第 28 週(13.69 人/定点)であった．以降年末まで，2.0 人/定点を上回る週が続き，長く緩やかな山を描く形となった(図 2)．

保健所別患者報告状況(人数/定点及び報告数)では，2007 年は，南部が最多で(883.96 人/定点，年間報告数 9,724 人)，次いで中央(674.65 人/定点，年間報告 10,120 人)，中部(434.10 人/定点，年間報告数 8,682 人)，宮古(349.00 人/定点，年間報告数 1,396 人)，北部(325.60 人/定点，年間報告数 1,628 人)，八重山(287.30 人/定点，年間報告数 862 人)の順となった(図 3).

保健所別週別定点当たり患者報告数では南部が第 7 週～31 週(第 12 週がピークで 88.18 人/定点)に注意報，警報が最も長く，冬季から夏季に継続して発令された．

第一流行期には，中央が第 6～18 週(第 11 週がピークで 65.93 人/定点)，中部が 8～16 週(第 11 週がピークで 42.80 人/定点)，北部が第 9～17 週(第 12 週がピークで 36.80 人/定点)までに注意報，警報が発令された．

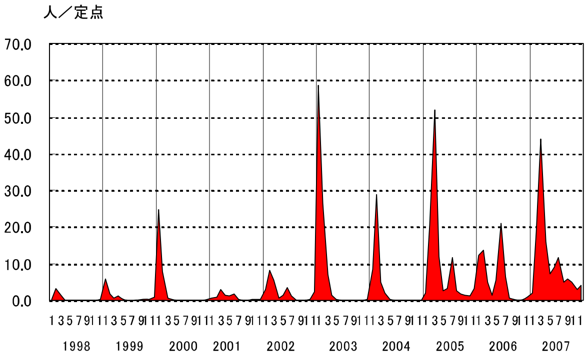


図 1．年次別患者報告状況の推移

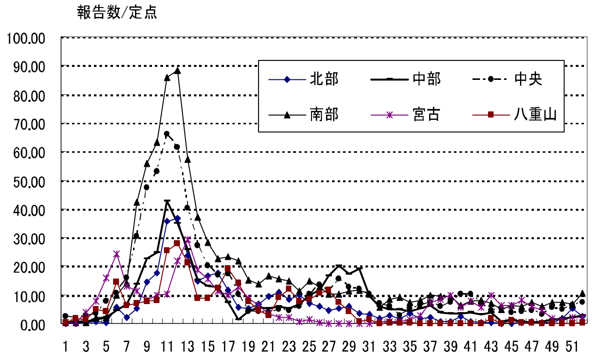


図 4．保健所別週別定点当たり患者報告数

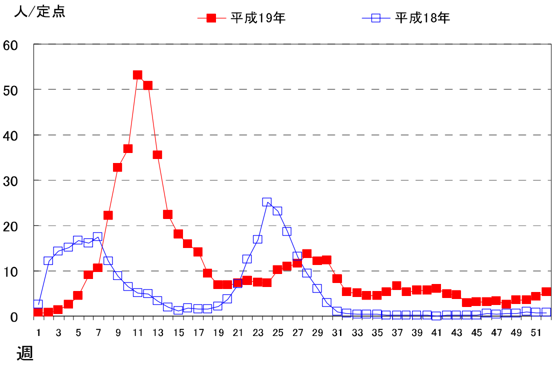


図 2．定点当たり患者報告数

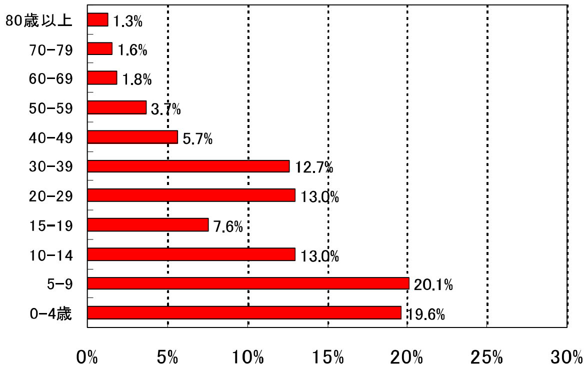
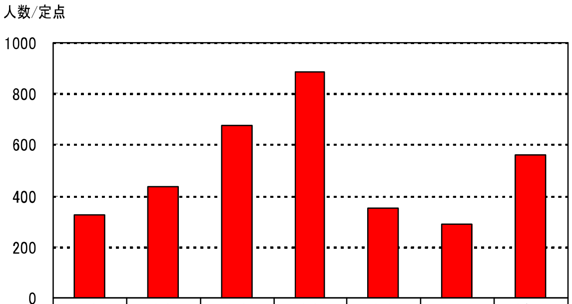


図 5．年齢階級別患者報告割合



	北部	中部	中央	南部	宮古	八重山	沖縄県
人数/定点	325.60	434.10	674.65	883.96	349.00	287.30	558.83
報告数	1628	8682	10120	9724	1396	862	32412

図 3．保健所別患者報告状況(人数／定点及び報告数)

また宮古が 5～18 週(第 13 週がピークで 29.25 人/定点)までに，八重山が 6～18 週(第 12 週がピークで 28.00 人/定点)に注意報が断続的に発令された．

第二流行期は，中央が第 25～31 週(第 28 週がピークで 15.40 人/定点)，中部が第 25～30 週(第 28 週がピークで 20.05 人/定点)，北部が第 22 週(第 11.00 人/定点)のみに注意報が発令された．

八重山が 23～27 週(第 23 週がピークで 12.00 人/定点)に注意報が断続的に発令された．その間，宮古には注意報または警報は発令されなかった(図 4)．

年齢階級別患者報告割合では，2007 年は，5-9 歳(112.47 人/定点，年間報告数 6,523 人)が全体の 20.1%と最も多く，次いで 0-4 歳(109.50 人/定点，年間報告数 6,351 人，全体の 19.6%)，10-14 歳(72.74 人/定点，年間報告数 4,219 人，全体の 13.0%)と続いている(図 5)．

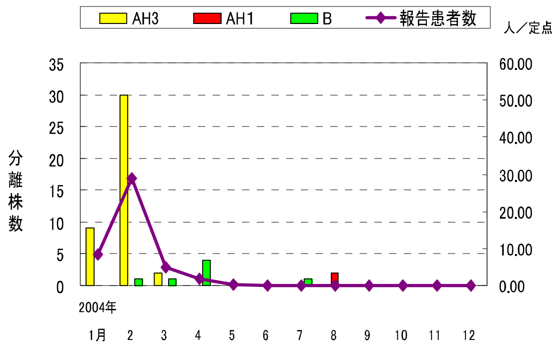


図６．月別インフルエンザウイルス分離状況と報告患者数(沖縄県・2004 年)

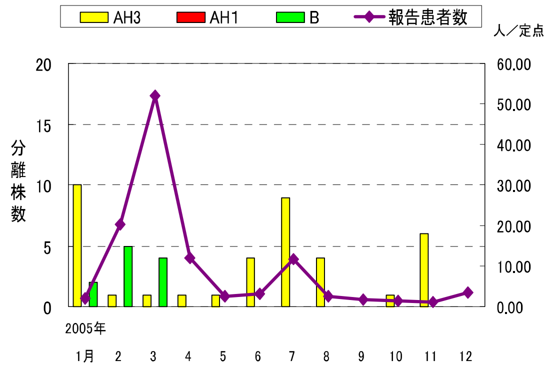


図７．月別インフルエンザウイルス分離状況と報告患者数(沖縄県・2005 年)

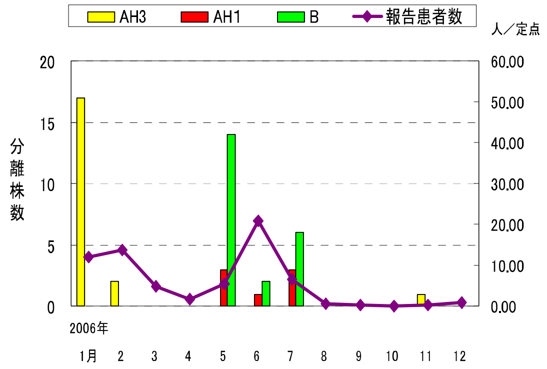


図８．月別インフルエンザウイルス分離状況と報告患者数(沖縄県・2006 年)

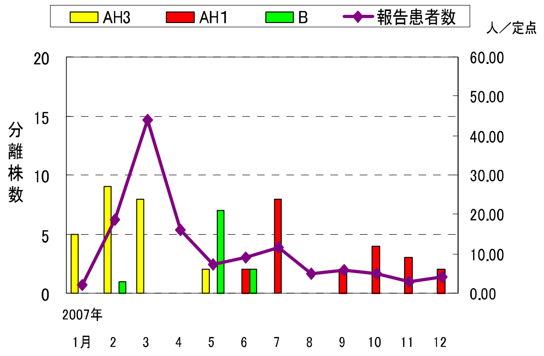


図９．月別インフルエンザウイルス分離状況と報告患者数(沖縄県・2007 年)

インフルエンザウイルス分離状況[1]では，2007 年中, 当研究所衛生科学班への検査依頼が 84 検体があり、うち 55 件のインフルエンザウイルスが分離された.

2004～2005 年の冬季には AH3 亜型と B 型，2005 年の夏季には AH3 亜型，2005～2006 年の冬季には AH3 亜型, 2006 年の夏季には AH1 亜型と B 型，2006～2007 年の冬季には AH3 亜型と，2006 年の夏季には B 型と AH1 亜型が多く分離されている. (図 6，図 7，図 8，図 9)

2006～2007 シーズン夏季のインフルエンザー沖縄県おける病原体検出状況[2]では，各シーズンの冬季と夏季の比較では流行株の型が同一の場合と異なる場合があり，AH3 亜型，AH1 亜型，B 型のいずれの型も夏季に流行している. その中でも 2006～2007 年の 2 年間の特徴として夏季の AH1 亜型の分離が多くなっており，冬季と夏季の分離株の差異が目立つ. 今後もこのような状況が続くかどうか知るためにも夏季のサーベランスを継続していく事が重要であると思われる.

Ⅳ 参考文献

1) 平良勝也，糸数清正，久高潤，中村正治，仁平稔，岡野祥(2008)沖縄県における病原体検出状況(平成 19 年度). 沖縄県衛生環境研究所報，42：147-149

2) 平良勝也・岡野祥・仁平稔・糸数清正・久高潤・中村正治(2007)2006/07 シーズン夏季のインフルエンザー沖縄県おける病原体検出状況．病原微生物検出情報月報，28 (11)：12-13